

～TANKYU～

谷地南部小学校
校内研究だより
2022. 6. 20
No.6 文責 荒木秀

第一回授業研究会迫る 子どもの姿で語りましょう

いよいよ、第1回の授業研究会が迫ってきました。奥山先生、鹿間先生、お忙しい中のご準備本当にありがとうございました。以前校長先生がおっしゃられたように、当日は、指導案や準備してきたことなど一旦忘れて、ぜひ子どもの反応を見ながら、子どもの思考に合わせて授業をしていきましょう。

授業を参観される先生方も同じです。ぜひ、子どもの姿を見てください。そして、その姿がなぜ生まれたのかをいろんな角度から考えてください。動（やや）もすると、教師の指導や技術だけで語られてしまうことがあります。それでは、子どもの姿をきちんと捉えたとは言いきれません。教師の手立てより、子どもの姿が優先されるべきです。何ていったって主体的、対話的に学ぶのは「子ども」なんですから。だから、子どもの姿を中心にすえて、授業を語りましょう。

「どうしてあの子は、あそこでスイッチが入ったんだろう（入らなかったんだろう）。」

「〇〇さんの発言があったから、△△さんは次に発言できたんだな。」

「あの発問に対して、□□さんはこんなことを考えていたんじゃないかな。」

授業者は、子どもの姿を意外と捉えられていないものです（授業研となればなおさら）。せっかく、教室にたくさんの先生がいらっしゃるのですから、たくさんの子どもの姿を捉えて、授業者の先生に伝えてあげましょう。そうすれば、授業者の先生も、次の時間から今まで気づかなかった視点で、子どもたちを捉えることができるはずです。事後研で、たくさんの子どもの姿が出てくるのを楽しみにしています。ぜひタブレット（写真や動画）も活用ください。

授業は教師と子どものインターアクション（相互作用）の過程であるから、「教授」と「学習」の一方だけを見ても何も見ていないのも同然である。

佐藤学・稲垣忠彦（1996）『授業研究入門』岩波書店